

令和 7 年度小平市立小平第十四小学校～「全国学力・学習状況調査」結果概要～

1 調査目的・対象

児童・生徒の学力や学習状況を把握・分析し、成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、今後の児童・生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てるための調査です。

2 調査内容

(1) 教科に関する調査

身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等、また、知識・技能を実生活の様々な場面で活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等に関することを児童が答える調査です。

(2) 生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査

学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関することを児童が答える調査です。

3 各教科の調査結果の分析

【国語】

状況の分析

全 14 問の正答率は全国平均より 2.2 ポイント高かったが、都平均より 1 ポイント低かった。領域別では、「読むこと」で都平均を 3.8 ポイント上回り、文章を正確に読み取り、要点を整理する力が比較的高い。一方、「話すこと・聞くこと」は、6.5 ポイント下回り、「書くこと」も 1.4 ポイント低かった。問題形式別の正答率では、「記述式問題」が都平均より 3.6 ポイント低かった。「記述式問題」の「読むこと」の問題で、都平均を 4.2 ポイント上回ったが、「書くこと」の問題で、11.3 ポイント低かった。

課題

「話すこと・聞くこと」では、特に話し手の考えと比較して自分の考えをまとめる問題で都平均を 12.4 ポイント下回り、聞き取りと表現に課題が見られた。記述問題については、「最後まで回答を書こうと努力した」との回答が都平均より 16.7 ポイント低く、「無回答率」が高い傾向があり、「書くこと」についての問題の無解答率が 10.5 ポイント高いため、正答率低下の要因となった。昨年度同様、自由記述式のアウトプットに課題が残り、自分の考えを相手に伝わるように書く経験が不足していることがうかがえる。

学校で取り組む具体的な改善策

- 「話すこと・聞くこと」「書くこと」の力を向上させるための取組を重点化し、実践する。例として、
 - ・ 学習者用端末を活用し、同じテーマで意見交換を行い、相手の考えと自分の考えを共同学習支援ツールに整理して発表する活動を国語科を中心に各教科で実施する。
 - ・ 日直のスピーチや学習感想の発表、インタビュー活動などを通じて、日常的に自分の考えを表現したり、相手の意見を聞いて要約したりする時間を確保する。
 - ・ 新聞記事等を題材に、読んだ内容から自分の意見や考えを記述する時間を設ける。
 - ・ 教科書を参考に、意見文や提案書の書き方を身に付けられるよう、定期的に「書く」指導を行う。
 - ・ 一定の時間内で感想を書いたり推敲したりするなど、時間を意識した書く活動を取り入れる。
 - ・ 書く前にペアトークやグループトークを取り入れて、友達の多様な考え方に触れることで、書く内容の充実を図る。
 - ・ 朝学習の時間を活用して、語彙を増やしたり文章を書いたりし、国語科以外でも「書く」学習の機会を確保する。

【算数】

状況の分析

全 16 問の正答率は、全国平均より 7 ポイント高く、都平均より 1 ポイント高かった。領域別では、都平均と比べると、「図形」は 0.5 ポイント、「変化と関係」は 2.6 ポイント低く、共に令和元年度から課題となっている。評価の観点で見ると、「知識・技能」を問う問題は 6.3 ポイント高く、計算力は安定している。一方、「思考・判断・表現」を問う問題は 4.8 ポイント低かった。記述式問題が苦手な傾向は国語と同様であった。

課題

「図形」の五角形を 2 つの図形に分割し、式を用いて面積を求める問題の正答率が都平均より 12.4 ポイント低かった。基本図形に分割して面積を求める思考の過程に課題が見られた。「変化と関係」では、使いかけのハンドソープがあと何プッシュできるかを求めるために必要な二つの数量を見出す問題の正答率が 4.7 ポイント低かった。どちらも記述式の問題で、考えを数式や文章で説明する力が不十分であるため指導が必要である。

学校で取り組む具体的な改善策

- 算数の授業において「図形」「変化と関係」についての技能を向上させる。例として、
- ・整数、小数、分数などの計算問題だけでなく、「多角形」「展開図」「見取図」「速さ・距離・時間」についての算数プリントや東京ベーシック・ドリルを活用し、各領域の基礎学力を定着させる。
 - ・朝学習や家庭学習においても、実態に応じて、苦手な領域の東京都ベーシック・ドリルを活用する。
 - ・図形の性質や構成要素に着目させ、活動を通して図形についての理解を深められるようにする。
 - ・デジタル教科書を活用して、「図形」を視覚化して理解を深められるようにする。
 - ・毎時間、学習課題に対して考える時間を十分確保し、ペアトーク、グループトークなどで友達や自分の考えを表現し、考えに自信を付けさせた後に、記述してまとめる機会を設定する。

【理科】

状況の分析

理科の正答率は全国平均より 6.9 ポイント、都平均より 4.0 ポイント高い。「エネルギー」で 6.7 ポイント、「粒子」で 4.0 ポイント、「生命」で 4.1 ポイント、「地球」で 4.4 ポイントと、全ての領域で都平均を上回った。本校では TA や地域ボランティアが学年花壇の活動を支援し、理科専任講師が T2 として授業に入り、教材準備や実験補助、適切な補足説明を担任と連携して行っている。こうした環境整備が学習成果の向上につながったと考えられる。

課題

前回（令和 4 年度）の調査では、実験器具の名称に関する正答率が最も低かった。今回も顕微鏡の操作で適切な像を得る問題が都平均より 14.5 ポイント低く、実験・観察の活動に課題が見られる。器具の名称や扱い方を全員が理解できるようにするとともに、実験・観察の手順等の説明に偏らず、安全管理を徹底しつつ体験活動の時間を十分に確保する必要がある。また、実験器具を事前に整え、児童が主体的に扱える環境を準備することが重要である。

学校で取り組む具体的な改善策

- 理科の授業の実験において、器具の正確な名称や扱い方について定着させる取組を重点化し、実践する。例として、
- ・講師と連携して、予備実験などで児童が安全でスムーズに実験活動を行える計画を立てる。
 - ・実験活動の中で、実験で扱う器具の名称や活動計画を改めて確認し、正しく実験を行える時間を確保する。
 - ・教科書の巻末ページや教材動画などを活用し、実験結果だけでなく包括的な学習のまとめを行う。

毎日同じ時刻に起きる（6ポイント）、寝る（4.9ポイント）という生活習慣に対する意識が高く、都平均を上回った。学級会については「互いの意見の良さを生かして解決方法を決める」が12.1ポイント、「決定事項に取り組む意識」も7.2ポイントと平均より高い。理科では観察・実験を通じた考察力など主体的な学習姿勢について肯定的な回答が多かった。学校の授業時間以外に、1日当たり1時間以上学習している児童の割合は、平日で62.3%おり（2時間以上は42.6%）、休日は34.4%（2時間以上は21.3%）となっている。

算数・国語の記述式や試験時間に関する自己評価は約10ポイント都平均より低く、得点の割に自信のなさが伺える。ICT機器の使用経験は「ほぼ毎日」の回答が33.2ポイント上回り、楽しく自分のペースで学習したり発表スライドを活用したりする点では肯定的な回答が多い。一方で「文章作成」「情報収集・整理」「情報共有」については都平均をやや下回り、経験が自信や成果への実感に結び付いていない。「地域や社会をよくする思い」は肯定的な意見が3.6ポイント低く、「地域の大人とのかかわり」も6.7ポイント低かった。

学校で取り組む具体的な改善策

- ・保健だより・給食だより・SNS がんばりカード・SC の活用・ふれあい月間アンケートなど、学校からの情報発信を継続し、家庭と連携した生活習慣づくりを進める。
- ・国語科担当教員や学校図書館支援員と連携し、調べ学習で図書活用や情報の整理・表現の力を高める。
- ・国語・社会・総合的な学習などを関連付け、検索、情報の取捨選択、表・グラフ化、比較・根拠付け、発表、相互評価までの一連の学習過程を設定する。成果物は学級掲示や学年発表で共有し、学びを深める。
- ・教科指導の導入の工夫により、児童の興味・関心を高める学習展開を進める。
- ・学校だより等を活用し、休日も学習者用端末や学習ドリルを用いた自主学習の推進を家庭に周知する。
- ・コミュニティ・スクールの会議を活用し、地域人材のリストを基に、地域との関わりが少なくなる高学年の地域行事や体験活動をより充実させる取組を検討・実施する。